

外道クライマー

宮城公博・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

目次

第一章 逮捕！日本一の直瀑・那智の滝

II

第二章 タイのジャングル四六日間の沢登り その一

25

第三章 日本最後の地理的空白部と現代の冒険

99

第四章 台湾最強の渓谷 チャーカンシー

125

第五章 タイのジャングル四六日間の沢登り その二

149

第六章 二つの日本への挑戦

183

第七章 タイのジャングル四六日間の沢登り その三

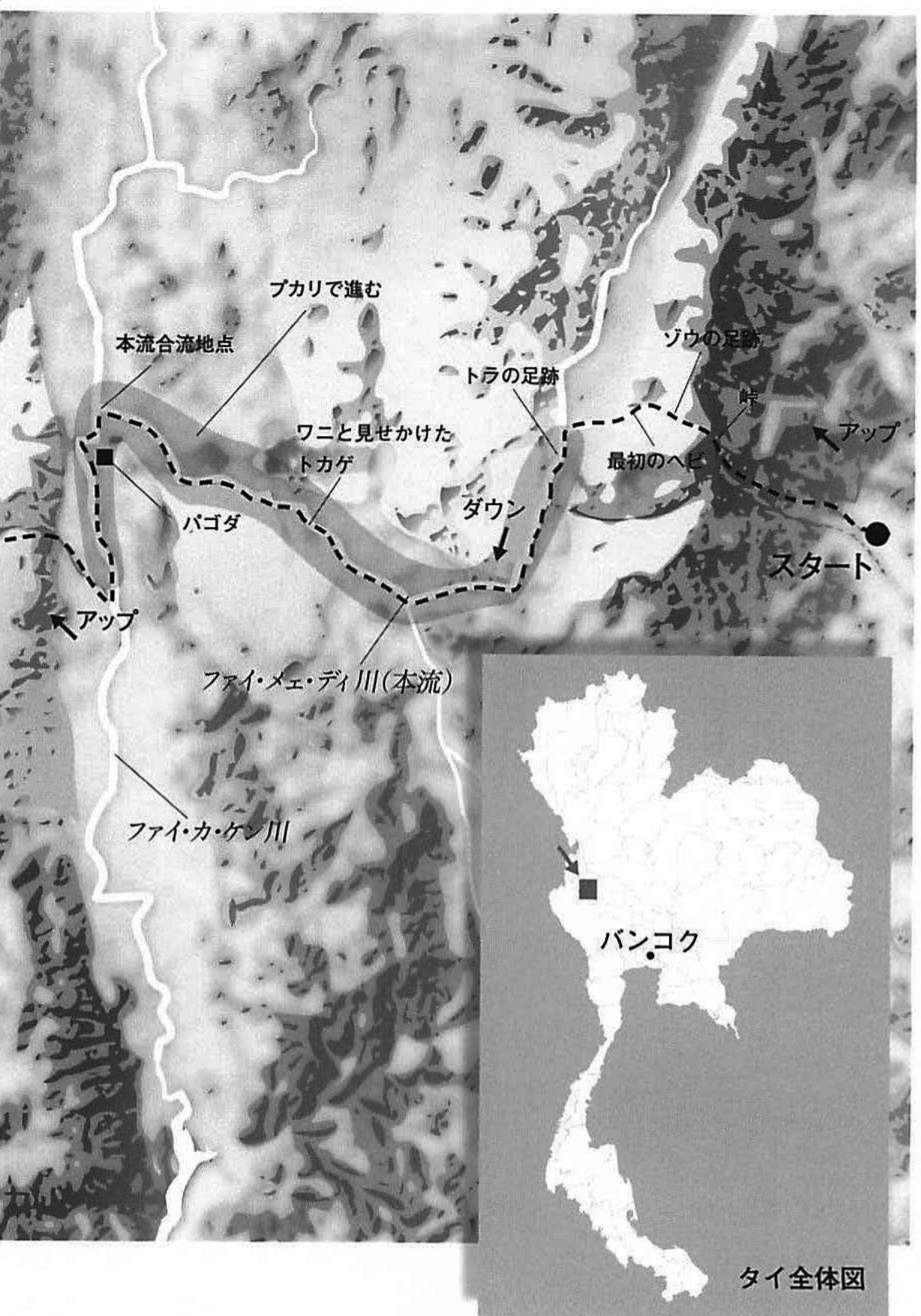
209

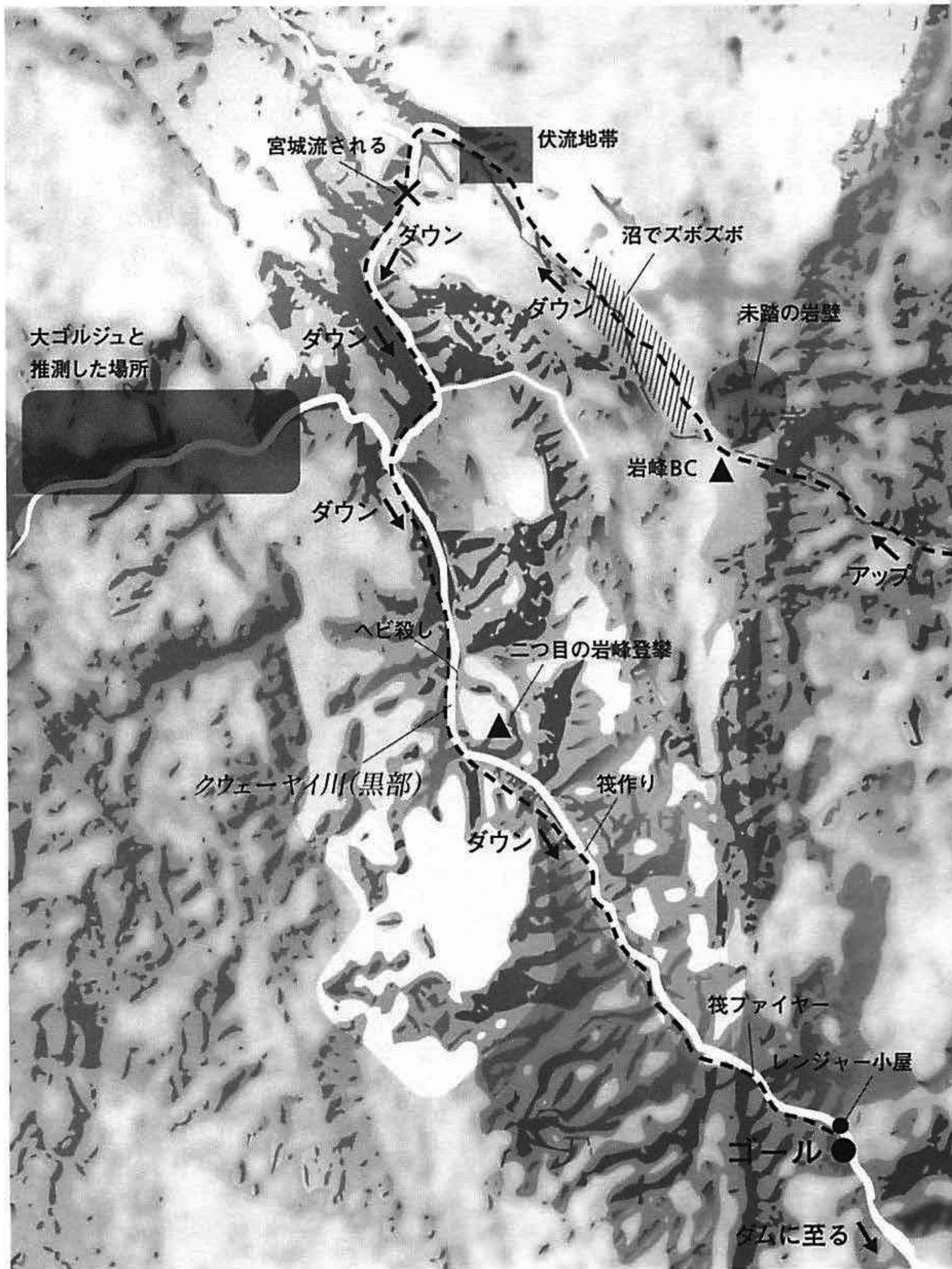
最終章 沢ヤの祭典 ゴルジュ感謝祭

253

解説 スーパーアルパインクライマー宮城 角幡唯介

266





タイ遡行ルート

沢 登 り ・ 人 名 用 語

(本書を読み進めるうえで、読み飛ばしても影響はない)

あ 行

*青島 チーム野良犬のリーダー。伝説の沢ヤ。ゴルジュ界最重要人物。チーム野良犬はチームと名付けられているが、所属は青島ひとりである。毒の青島として知られ、あのサバイバル登山家・服部文祥、探検家・成瀬陽一も、青島の毒にやられてひどい目にあっている。ちなみに毒とは、毒舌などの比喩の意味もあるが、沢登りのやりすぎで本当にやばいものを保菌しているらしい。「野良犬通信」という同人誌を発行している。

*悪絶 沢ヤ界の造語。筆舌に尽くしがたい形容。

*ウエットスーツ ネオプレーン素材の全身タイツ。冷水や滝の瀑風から肉体をガードするゴルジャーの鎖帷子。くさりかたびら

*大西良治 日本最後の地理的空白部「称名廊下」の初迦行を成し遂げた世界最強の沢ヤ。御神体・那智の滝を登ったことで逮捕される。

か 行

*キャニオニング 滝壺に飛び込みながら、沢を下りていくフランス発祥のアクティビティ。

*懸垂下降 ロープを伝って下りること。懸垂とも略される。

*ゴルジャー ゴルジュクライミングを志向する者。ただゴルジュに行くだけではゴルジャーとは呼べず、ゴルジュに魂を込める必要がある。また、キャニオニア(降溪者)はゴルジャーには含まれない。

*ゴルジュ 兩岸が立ち上がり狭まった水路。フランス語で喉のどの意味。廊下ともいう。

*ゴルジュ感謝祭 「死登! 死者満載」がキャッチコピーの奈良県・池原ダム周辺で行われるゴルジャーの祭典。死亡率四割が想定されているため、参加者

とは別に遺骨整理係が募集される。今のところ、死者は出ていない。

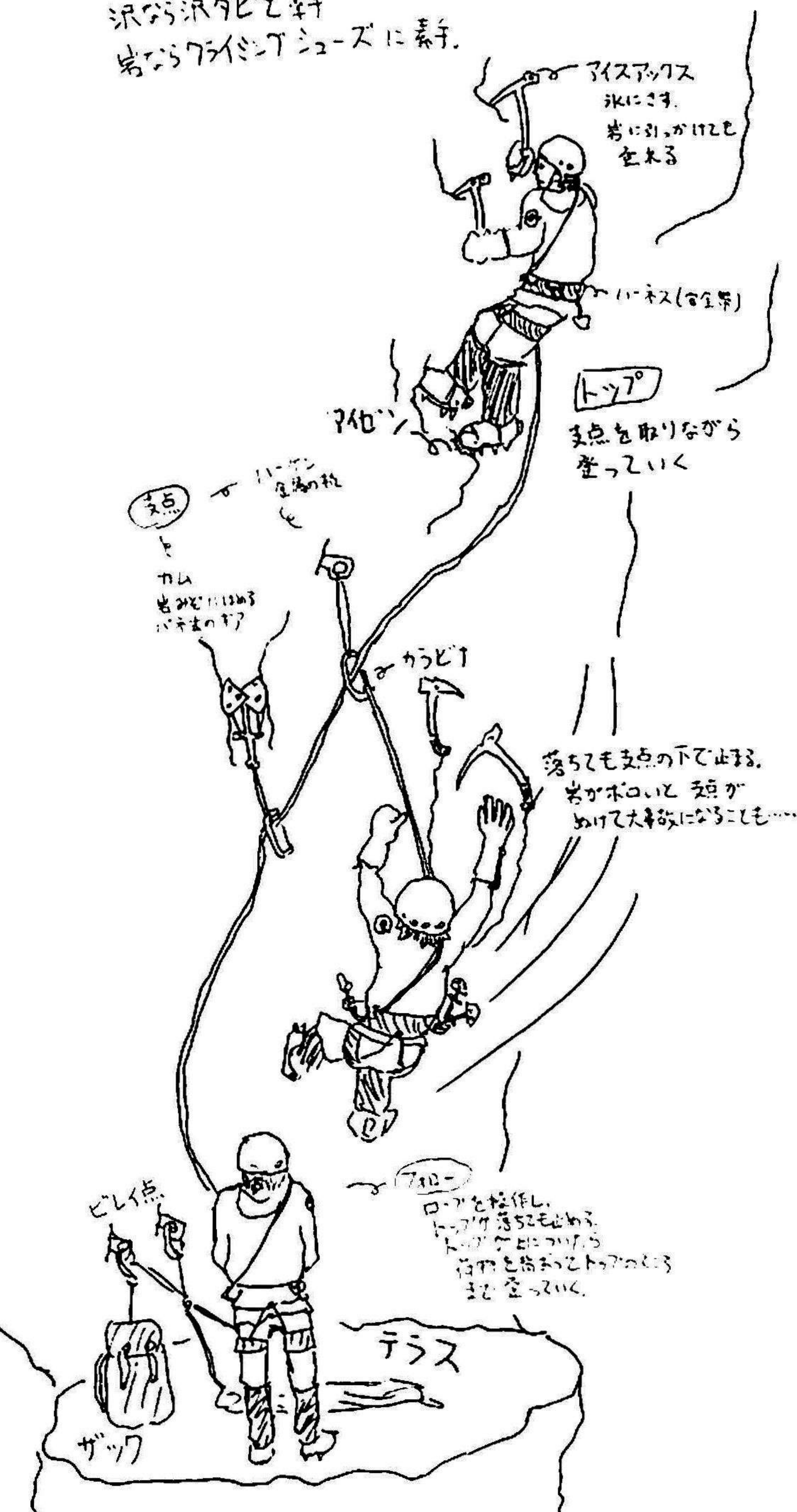
*ゴルジュストロングスタイル 猪木寛至のストロングスタイルをゴルジュに持ち込んだもの。水流突破を基本とし、「安全無視」で登攀とうはんを行う男のスタイル。

さ
行

***佐藤裕介** 世界的アルパインクライマー。厳冬期黒

ライミングのしくみ

岩氷漁登る対象によって
装備が変わるが、
システムは基本的に同じ
沢なら沢タビと軍手
岩ならクライミングシューズに素手。



* 沢ヤ 沢登りに異常なこだわりをもった偏屈な社会不適合者。

* 沢ヤの力を見せてやる 沢ヤのキメ台詞のようなもの。

* 称名滝 立山にある日本最大の瀑布。全四段三五〇メートル。

* 称名廊下 称名滝のすぐ上に存在する日本最後の地理的空白部。

* スーパーアルパインクライマー フォトグラファー高柳傑のこと。ハイパーメディアクリエイターのようなもの。

* 遡行 沢を登ること。同義語に遡上、遡溪。

た

* 高柳傑 世界唯一のスーパーアルパインクライマー。

。フォトグラファー。著者の頼りなき相棒。本作の主人公であり、テーマ。

* 魂を込める 巨大な何かと相対したとき、自らの生

命を捧げてでも欲望を貫き通す行為。

な

* 成瀬陽一 著書『俺は沢ヤだ!』で知られる沢ヤ。テレビで特集をされるなど日本で最も有名な沢ヤ。野良犬の青島の相棒で、ゴルジュ突破のパイオニアの一人。自身の著書では山奥のあばら家に住み、自然とともに生きることの重要性を自慢していたが、現在ではオール電化の家に住んでいる。

* 人間脚立 肩車をした二人の人間をはしご代わりにすることで、登攀困難な滝を乗り越える行為。人間脚立では届かない高さの滝には「ハンマー投げ」を使う。

は

* ハンマー投げ 忍者が高い塀を登る際、塀の上に鉤縄を投げ、縄をたよりに登るように、沢ヤが登攀不可能な滝に出合った場合、ロープを連結したハンマ

ーを滝の上に投げ、ひっかけ、それをたよりに登る。ハンマーがちゃんと岩溝いわみぞに引っかかってくれる可能性はマレで、ハンマーが外れて滑落し、粉砕骨折した者もいる。鉄人・室伏広治に敬意を表し、「むろふしーしーしー」と叫んでハンマーを投げると、飛距離が伸びるような気がする。

*藤巻 川崎在住の五〇手前のオヤジで著者の頼もしいほうの相棒。昭和の大登攀時代を生きた最後の現役。自室にある山岳雑誌「岳人」のバックナンバーの間に、若いころタイで遊んでいた女の子の写真を隠している。絶倫。

*淵ふち 水深が深く流れの緩い水路。同義語はトロ場。

ま

*巻く・高巻き 困難な滝や岩壁の直登を回避して、周辺の緩い斜面を利用して滝の上まで登る行為。

*宮城公博 著者のこと。無職の沢ヤ・クライマー。別名「なめたろう」、通称「ナメちゃん」。作家・探検家の角幡唯介から「日本を代表するアルパインクライマー」と評されるが、日本代表枠が一五枠あれば入るかもしれないという程度の力量。そもそも、アルパインクライマーは絶滅危惧種であり人口が少ない。

やらわん行

*藪漕やぶこぎ 藪（背丈ほどの草、木、ツルなど）を掻き分けながら進むこと。ジャングルの沢登りの場合、行程の五割はこの藪漕ぎになる。

*ユマーリング 懸垂下降の逆で、ロープを頼りに上へと登る行為。商品名のユマールからきており、正式名はアッセンディング。別名きのぼん。

カバー写真撮影・イラスト 宮城公博

台湾・チャイカンシー第二ゴルジュ。

絶望的な一〇メートル直瀑の登攀ラインをうかがう大西良治。

口絵写真撮影 宮城公博、高柳傑

佐藤裕介、藤巻浩

ブックデザイン 鈴木成一デザイン室

第一章 逮捕！日本の直瀑・那智の滝

日本一の滝は和歌山県にある。熊野・那智の滝は一三三メートルの落差を誇り、一段の滝としては日本最大の瀑布だ。巨大な一枚岩を縦に割るように轟々と水を落とすその姿は、数ある日本の滝の中でも格別な風格があり神秘の存在を思わせる。おそらくはるか古代、人がこの滝を初めて目にしたそのときから自然崇拜の対象にされてきたのではないだろうか。

滝の前には日本全国に三〇〇〇余あるといわれる熊野神社の総本山・熊野三山のひとつ、熊野那智大社が六殿からなる社殿をかまえている。社伝には「神武天皇が熊野灘から那智の海岸にしきうら」に御上陸されたとき、那智の山に光が輝くのをみて、この大瀧をさぐり当てられ、神としておまつりになり……」と綴られている。神武東征の時代から現代に至るまで、那智の滝信仰は熊野のみならず全国に広がっていき御神体として崇められてきた。今では世界遺産のひとつにも数えられ、社殿と那智の滝が並ぶ姿は雅やかそのものだ。

二〇一二年七月一四日の午前八時、那智の滝、その左の岩壁部、滝壺から約八〇メートルの高さに私はいた。私の右一〇メートル先の空間には、垂直に流れ落ちる巨大な水の束があり、風にあおられた水の飛沫が時おり頬を触りにきていた。

見上げると岩壁は大きく反り返り、上端には滝の落ち口が見える。上流からの圧力で押し出された水は、落ち口から勢いをもって飛び出すと、宙を暴れるようにして少し舞い、重力によって収束され、巨大な水の束となって私のそばを落ちていく。その水の束は、滝の中間にある岩壁の凸部にぶつかり、扇のように飛散し緩やかに滝壺へと吸い込まれていく。その一部は水面に反射して滝壺の上へと跳ね上がり、滝壺を覆うように薄い飛沫のドームを作る。那智の滝が生まれてから、何千年、何万年と繰り返され続けた滝と水の歴史。それは水の浸食、地震や造山活動で、形を変えながらも延々と今日まで続いてきた。その長い歴史の中、今までにならぬ現象、「沢ヤ」なる三匹の男が滝にへばりつく。私は今、二人の仲間と共に、日本一の直瀑・那智の滝を登っている。

滝の威厳と飛沫で空気が凜として、真夏にもかかわらず晩秋のような冷たさを感じさせていた。振り返ると、那智大社の社殿と青岸渡寺の三重の塔があつて、朱色が印象的なそれらの建築物は、左右にある緑の尾根と並んでひとときわ映えて見えた。その先には尾根に囲まれるよう

に熊野灘の海が広がっている。

下を見ると滝壺の先にある滝見台に人が集まり始めていた。ここから滝見台までは二〇〇メートルほどの距離があり、彼らが滝を見上げているのか私を見ているのかはよく分からない。私は岩溝いわみぞに生えた木の陰にいた。繁みが私の姿を隠し、おそらくまだ下の人たちは私のことに気づいてないはずだが、それも時間の問題だろう。ロープを引いてトップ（先頭）を登っている仲間は、もうすぐ繁みから飛び出し、滝見台から丸見えの最も目立つ岩壁部分に乗り移ろうとしていた。

私のすぐ隣にいるもう一人の仲間が、滝見台に集まる人を見て何やらぶつぶつと文句を言っている。佐藤裕介だ。佐藤は日本のみならず世界でも「最強」と評価されるアルパインクライマー。高いクライミング能力と百戦錬磨の経験、下手に触ればこちらが火傷するような熱い情熱で山に挑んでいる魂のクライマー。ニセモノの自称登山家がはびこる登山界において、誰もが認める数少ないホンモノの一人だ。

トップで登っているもう一人の仲間、大西良治。佐藤ほどの知名度はないが、過去やってきたことの凄まじさは佐藤に勝るとも劣らない。普通の沢ヤが一生をかけて夢見るようなゴルジュを、単独でより難しいスタイルで毎週のように登り尽くし、彼によって初めて解き明かされたゴルジュは無数にある。近年の沢ヤ界では、大西登場前、大西登場後と言われるほどに沢ヤ

の歴史に影響を与えている。私が知る限り、世界で一番沢登りが上手い男だ。

その大西が今、岩溝から生えた木の最先端から、滝の最上部の反り返った岩壁に乗り移る。もう大西の姿は神社の滝見台から丸見えだ。いつ見つかったもおかしくはない。私の脳裏に「逮捕・会社クビ」がよぎるが、そんな中、大西は那智の滝最上部の悪絶な壁をじわりじわりと登っていく。

なぜ私たちが、あきらかに登ることが許されないであろう御神体・那智の滝を登ろうと思つたのか、答えはシンプルだ。別に目立ってやろうとか、名を売ってやろうなんて考えは毛頭ない。国内の岩壁や大滝に登り尽くされたこの現代に、未だ日本一の滝が未登のまま残っている。しかも滝の形状は国内の滝では他に類を見ないほど見事に整った一枚岩。そんなものがある以上、沢やなら登りたいと思わないほうがおかしいのだ。沢登りを始め、那智の滝の存在を知って以降、私は何年もこの課題のことを考え続けた。

しかし、滝は御神体であり、自然崇拜の対象としては日本有数の参拝客を集めている那智の滝だ。幾人かに登攀とうはんの計画を話したが、一緒に登ってくれる山仲間など誰もいなかった。だが、それに二人だけ賛同する男がいた。それが佐藤と大西だ。聞けば、私から那智の滝計画を知らされる以前から、二人ともこの滝に登攀の対象として考えていたのだ。それから滝の登攀を実行するまでに時間はかからなかった。

参拝客や神社にバレないように、夜明け前からヘッドランプの明かりを頼りに滝を登りだし、参拝客が集まる午前九時までに登り切る計画でいた。だが、その計画は変更された。夜明け前、駐車場から柵を越えて滝壺の横に立ったとき、滝壺から跳ね返った飛沫と風が身体にぶつかった。そのとき、暗闇で滝の全容が見えないにもかかわらず、滝壺だけでも神の存在を感じさせる堂々たる雰囲気私に伝わったのだ。すると不思議なことに、隠れて登ろうという気がなくなった。日本一に挑むのに、見つかつて捕まることを気にし、こっそり登ろうなどと、とんでもない保身。夜明けを待ち、ここだというルートを見極め堂々と登るのが、クライマーとして、沢ヤとして、滝に対する礼儀だ。

夜明けを待ち、ここぞというルートを見極め、私たちは登りだした。この場所にたどり着くまで、堂々と那智の滝と正面切って向き合い触れ合ってきた。そして今、先頭の大西が那智の滝の最大の核心部分であろう反り返った壁にさしかかっている。不安定なクライミングをしてるのが見て取れる。最強の沢ヤ、あの大西がてこずっている。過去、幾多の悪絶なゴルジュや大滝を、ひよいひよいと軽くこなしてきたあの大西が、那智の滝最上部の岩壁では苦戦している。日本一の直瀑・御神体・那智の滝、それは登攀の対象としても、日本一に悪絶で難しく……。

「下りてきなさい！」

突如、拡声器の音が滝に響いた。見下ろすと、滝壺近くに神社関係者や警察らしき人たちが集まりだしている。「下りてきなさい！」という声はいつしか荒らげられ「下りろ！」という怒鳴り声に変わった。

大西は拡声器の声を振り払うように吠え、じわりじわりと滝の核心部を登っていく。相当なプレッシャーに違いない。滝の瀑音で大西には聞こえないかもしれないが、「頑張れ」と声を出して祈った。しばらくすると大西の動きが止まった。大西はこちらへ振り返り、しかめた顔で腕を振りながら叫んだ。

「駄目だ、登れないっ！ 下ろして！」

佐藤がゆつくりとロープを操作して大西を下ろす。大西はロープにぶら下がり、壁にセツトした登攀器具を回収しながら下りてきた。

「何の手掛かりもない、無理だ……」

いつも飄々とした男は、汗びっしりになり、顔をくしゃくしゃにして悔しがった。日本一の滝は、悪絶で、難しく、そして私たち三匹の沢ヤの力は、そんな自然のパワーに遠く及ばなかった。敗退だ……。

下から拡声器で罵詈雑言を叫ばれているが、私たちはそのまま滝壺に素直に下りようとした

わけではなかった。いや、私は下りようと思ったのだが、佐藤が驚きの提案をしたのだ。

「さっきから見えていたんだが、ここから左側の藪の斜面まで登っていけば、左側の尾根に抜けて逃げれるんじゃないか？　よし、ナメちゃん（著者）、ロープの操作を頼む」

そう言い終わると、佐藤はさっさと左への逃走ルートの仕事に出た。私は佐藤の言動に啞然とし、しばし頭が真っ白になっていた。警察から逃げるとは思いもよらない発想だ。さすが世界のアルパインクライマーは魂のありかたが違う。頭のネジが飛んでいる。私と大西はロープをたどって佐藤の元へ向かった。

「大西さん、ナメちゃん、思った通り、ここから藪やぶづたいに滝の左上に抜けられそうだ。そこからは藪を漕こいで山を回り込んで逃げればいい。山に入っちゃえばこっちのもんだ」

佐藤はさも当然のように言った。私はさっき動揺して言えなかったことを佐藤に言った。

「いや、裕介さん（佐藤）、逃げるってさ、ちよっと考えてよ。日本の警察舐なめすぎじゃない？　そもそも俺たちの車、神社の駐車場に停めてるんだぜ。財布もケータイもないし……。下りて平謝りしたほうがダメージ少ないって。現時点でもヤバいのに、逃亡罪までついたら、俺一〇〇パーセント会社クビだ」

「む、確かにそうだな。そうするか。とにかく下りたら、登っちゃいけなかったなんて知らなかったと、しらを切ろう」

懸垂下降で滝壺の横に下りると、神社関係者や強面こわもての警官から「てめえらやってくれたな」と、罵声を浴びせられた。そしてその中で誰よりも怒りを発する男がいた。八〇メートル上から見下ろしていたときでも、警察・神社関係者の群衆に紛れることなく、一人だけ圧倒的なオーラを発し、主張し、こん棒みたいなものを振り回し、警察から拡声器を取り上げて怒鳴っていたあの男だ。男は崇高そうな白い衣をまとい、その頭部は見事に禿はげ上がり、老齡だがそれをまったく感じさせない面魂つらだましいをもつて、ギラついた眼光で憤怒を発し続けていた。熊野那智大社・宮司だ。

宮司という立場にある男とは思えないほど、その怒りは、素直で純粹で無垢な、魂の震えだった。

そんな状況で、佐藤はふてぶてしく開き直っていた。心臓の太いやつ、どうしようもないほどに沢やだ。火に油どころか、核爆弾の雷管をハンマーでフルスイングしている。

「逮捕しろ！」

神社関係者たちが叫ぶ。私はすぐに逮捕されるかと思ったが、なかなか警官は私たちを逮捕しなかった。警官はしきりにどこから滝に行つたかを聞いてきた。

「お前ら、どこから滝壺に入つたんだ。この柵こえたのか？ それともあっちの柵か？」
「暗かったからよく覚えてないな、この辺からだつたかな」

佐藤がとぼけて答えた。

「確認するぞ、ここだな。この柵をまたいだんだな。よし、〇時〇分、軽犯罪法違反で逮捕だ、車に乗れ」

警察車両に乘せられる。窓のないテレビドラマとかで見たことのある犯罪者を乗せるやつだ。正直、ここまできると手錠をかけてくれることをちよつと期待していたのだが、手錠はかけられなかった。

警察が私たちをなぜすぐに逮捕しなかったのか疑問に思っていたが、先ほどの警官の言動からひとつの推測を思いついた。おそらく那智の滝を登ること自体では、すぐに逮捕することができなかったのではないだろうか。那智の滝は那智大社が所有する土地だと私は思っていたが、そうではないのかもしれない。日本では災害対策などの諸事情で、河川や滝は、個人・法人が所有できないことになっているらしい。那智の滝もその例外ではないのかもしれない。「立ち入り禁止」と書かれた柵を乗り越えたのが罪状になったのは、そういうことなのではないだろうか。

神社を離れ、新宮警察署に着く。すると、滝壺で怒鳴っていた警察官たちの態度は一変した。

「ま、取り調べはすぐ終わるから、今日、帰れるよ、しかしすげーなお前ら」

神社関係者の手前、必要以上に怒るふりをしていたのかもしれない。

ロープ、カム、ハーネスなどの登攀具を証拠物として押収される。三人別々の取調室で取り調べを受ける。

体格のいい警官に、職業・動機を聞かれた。

「サービス業です。動機は……、普段から趣味で沢登りをしているので、日本一の滝が那智の滝だと知って、それを登りたかった」

正直そのまま、答えた。

用足しで取調室を出ると、隣の取調室に佐藤がいた。雑誌で気取った顔でインタビューを受けている佐藤の姿を思い出すと、目の前で取調室にいる佐藤は、異観でシュールだった。

取り調べが終わると、指紋を採取される。大西はクライミングのしすぎで指がまっすぐに伸びないので、指紋採取で警官に無理やり手を押さえられて指を伸ばされると、

「いてっ、痛い、痛いって」

と、悶絶もんぜつしていた。

二、三時間の取り調べが終わると、解放された。

ケータイを見ると、すでにニュースになっているらしく、仲間からいくつかのメールが届いていた。佐藤に届いていたメールと合わせて紹介する。

「メジャーデビューおめでとう（探検家・角〇〇介）」

「なんで最後まで登らなかったんだ！　だせえなあ（アルパインクライマーJ）」

「ヤフーニュースで見たけど、あれ宮城君？（元彼女）」

ヤフーニュース!?　私はスマホをなぞってブラウザを開いた。「クライマーが世界遺産・那智の滝を登攀」といったような見出しがニューストップピックの二位に浮上していた。顔面蒼白になった。これは完全に会社を辞めることになる……。

大西は会社に電話をし、平謝りをし始めた。アウトドア企業からサポートを受けていた佐藤は、関係各所に電話をしまくり、謝罪し状況説明をしていた。翌日、娘と近くを旅行していた佐藤の妻がゴルジュ感謝祭のキャンプ地に来て、佐藤の目の前で泣き崩れた。

ここまで大騒ぎになるとは、想定外だった。さすがの私もどん底の気分になる。会社に帰り、いったいどう上司に説明すればいいのか……。

翌週、頭を丸めて三人で那智大社に謝罪に行った。社殿の一室、八〇歳に近い宮司は眉を吊り上げ怒りながら、あるいはほがらかな顔で優しく私たちを諭しながら、滝への熱い想いと歴史を語った。それを聞くと、こんな私にも思うところはあった。宮司が生涯を捧げてきた那智の滝・地元新宮市への情熱の前では、私たちの登攀の情熱など、そのとき限りの小さなものだったのではないか……。

雑誌、ネットにはいろいろ書かれたが、もとより私たちに神を冒瀆ぼうとくしようなどという意図はなかった。ずっとやってきた滝登りという私たちなりの自然への触れ合い方を、那智の滝でもやるだけだと思っていた。ただ、下調べが足りなかった。滝の形状は写真で撮って拡大して見ていたが、滝の歴史に対する勉強は皆無だった。私たちが登った日が那智大社の火祭りの日で、それが二〇一一年に紀伊半島を襲った大水害からの復興のシンボルのイベントだったことを事件後に初めて知った。

「いくらなんでも、せめて別の日に登ればよかった」と、悔やんだ。

「なんでそんなとこ登ったのよ！　どうなるか、わかるでしょ」

職場の会議で問題となり、女の上司は声を荒らげた。

日本一の滝という称号を抜きにしても、那智の滝は美しい。小さな滝を含めれば、私はこれまで無数の滝に登り、見てきた。その中でも那智の滝ほどに威厳を放ち、整った形の滝はそうそうない。そんな滝が誰にも登られていないという事実が、私に「人間に登ることができるのか？」という疑問をもたらしした。疑問は日に日に深まった。それは発作的な恋に舐まれるようなもので、疑問を解決しないことには夜も眠れなくなってしまうのだ。登っている自分を想像してゾクゾクし、まだ誰も見ぬ世界に夢を膨らませた。はたから見たら馬鹿げたことなのかも

しれないが、そのような冒険心・好奇心が私の行動原理の全てである。

「美しいから登る？ そんな子供みたいな言い訳が許されるはずないじゃない。あんた、何で、バカ……」

女上司は一瞬声を荒らげたあと、そう言って涙ぐんだ。母のように私を育ててくれた人だった。

それから数日後、私は七年間務めた福祉施設を辞めることになり、無職になった。気落ちし、悩んだ。

幸い、私には少しだけだが貯えがあった。この際、今までなかなかやることができなかった国内外の大きな沢や山に行こう。開き直って、そう気持ちを切り替えることにした。それが今後の人生にとって正しい決断だったかは分からない。ただ、そうやって生きていくことが私にとって一番自然だと思ったのだ。

まだ人類が知らない溪谷や岩壁に登りに行き、誰も見たことのない景色を目にする。地図を眺め、想像を膨らませた。

外道クライマー
宮城公博・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：1,600 円（本体）＋税
発売日：2016 年 3 月 25 日
I S B N ：978-4-7976-7317-3 C0095

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)